京橋川（広島市）

　このエッセイを書くにあたり、すぐに頭に浮かんだ川が、私が１７年間を過ごした広島市にある静かな町、牛田を流れるこの京橋川である。満潮と干潮の時間帯により水位も大きく変わるこの川では水遊びをしたことはなかったし、家からは少し離れているが、川に架かる牛田大橋をバスで渡ったり、幼稚園や小学校の時は側道橋を歩いて渡って川沿いの公園に遠足に行ったりして、私の生活にとても馴染みのある川である。広島は川が多い町としても有名であり、広島の町は全国有数のデルタ地帯の上にあるという話は小さい頃からよく聞いていた。その広島デルタを形成しているのが太田川という川なのだが、京橋川はその太田川水系の１つで、デルタ地帯を形成する６つの川のうちの１つなのだという。これは父が教えてくれたことであるが、私はこのエッセイを書くまで京橋川のことを「太田川」とひとくくりに呼んでおり、正確には間違っていたと知り驚いた。振り返ってみると、京橋川は比較的大きな川であると同時にそこに流れているのが私にとっては当然であったため、正確な名前が何かということを気にしたことがなかったのだと思う。私にとってこの川は、広島湾に続く立派な川であり、牛田のシンボルであった。大雨が降ると途端に水かさが増し、激しい音をたてて流れる様子は小さい頃の私にはどこか恐ろしく思えたが、同時に「こんな大きな川が溢れることはきっとないから、どんなに雨が降っても牛田は沈まない」と幼い私は変な安心の仕方をしていたことも思い出した。しかし、晴れた日に太陽の光を浴びるとその水面はきらきらと輝き、幾度となく美しいと感じたものである。

　京橋川について改めて考え、川と向き合ってみようと思った私は、まず川を見にいくことにした。興味を持った母と一緒に、散歩がてら３０分ほど歩いて川に到着した。とても天気の良い、日差しが暖かい日であったので、まず目に入ったのはきらきらと輝いている水面であった。母も私も側道橋の上に立ち「きれいだね」といいながら数分の間ぼんやりと川を眺めた。私の目には、年が明けたばかりのその日に、その川はとてもよく似合って見えた。以前に、川に油らしきものが浮いているのを見たことがあったが、この日は特に

水が濁っている様子でもなく、ごみが浮かんでいることもなかった。近づくと実は汚いのかもしれないと思い、干潮に近い状態だったため土手を下って近くで見てみたが、やはり汚いというよりはむしろきれいに保たれているという印象を受けた。たまに見かける鳥が何羽か水面近くを飛んでいる光景もその日は見ることはなかったが、母によると時々見かけるとのことであり、私が東京に出てからのたった数年の内にいなくなってしまった、ということではないようであった。先ほど述べたように油が浮かんでいるところも見たことがあったため、たまたまその日の川が澄んでいたのかもしれないが、それでもこの京橋川がきれいだということは、今は本流の太田川も同様に自然に近い状態で保たれているということだろうと思い、少しほっとした。最後にもう一度側道橋に戻ったときには「きょうばしがわ」と表記されたパネルも見つけ、この川の名を再確認することもできた。

私は、この京橋川をいつも目にして育ってきた。1枚目の写真の中の、川の向こう岸のところにはサクラの木が並んでおり、春になると満開に咲き誇る。そのサクラの下には平らな広めのスペースがあり、そこが先ほど述べた公園で、「白鳥公園」という名で皆に親しまれ、私も小さな頃はお花見をしに行ったり、散歩に行ったりしたことが何度もある。そして京橋川はいつもその目の前をゆったりと流れていたのだ。中学・高校時代には、学校が橋を渡った向こう側、つまり広島市の中心部にあったため、毎日バスで登下校していた。そのためほぼ毎朝、そして毎夕、私はバスの窓からこの川を眺めていた。この川は、私にとって、私の住む町「牛田」と賑やかな「市内中心部」の境目であり、この川を見るとどこかほっとした。中心部から戻ってくるバスが川に架かる牛田大橋を渡りきったところに「牛田へようこそ」という看板が掲げてあったのも、京橋川を牛田のシンボルとして考える理由の一つかもしれない。そんなことを考えている内に、初めてひとりでバスに乗ってピアノ教室に行った時のことを思い出した。その時の私は市内中心部のバス停から帰りに牛田行きのバスに乗ったものの無事に家に帰れるのかとても不安であった。だが、バスからこの京橋川が見えたとき、とてもほっとし、家に着くなり母に「もう一人で帰って来られるよ」と言ったのだった。今思うと、幼い私にとってこの川は、家の近くを流れているというただそれだけで、大きな味方であったのだろう。

一緒に京橋川を見に行った私の母に、この川の２０年前のことを聞いてみたところ、それほど大きな変化は見られないとのことであった。だが、昔の方が側道橋から釣竿を垂らしてハゼを釣っていた人や、干潮の時に土手を降りてしじみを取っていた人をよく目にしたという。ただ、私たちが土手を降りたところで、しじみなどの魚貝類の採取を禁止し、また採取する際には許可が必要であるとした看板を見つけたため、その規約に沿って釣りをする人がいなくなったのではないかとも考えられる。この看板がいつ立てられたものかは分からないが、いずれにせよ自然の魚介をむやみに採取することを防ぐことも、川を自然に近い形に保つための一環なのではないかと考えられ、人々の努力があってこの川が今も昔とそう変わらない姿で存在できているのではないかな、と想像させられた。しかし母は「川を眺める人の姿は昔より減ったのではないか」とも言っていて、「昔ほど川が人々に

とって親しみのある存在ではなくなってしまったのかもしれない」という会話を母と交わした。

ここで、京橋川について書かれたＷｅｂページを紹介したい。まず、「京橋川ばた界隈くらぶ」というページである。「京橋川ばた界隈くらぶ」は、京橋川の身近な川ばたを見直し魅力ある界隈にしようという意図で作られたものであるという。そのページには、京橋川は広島市中心部を流れる 6 つの川の東から２本目で、ＪＲ広島駅の南東で猿候川と分かれて、千田町で元安川と合流すると書かれていた。この６つの川というのが、先ほど父が教えてくれたと述べた、デルタ地帯を形成する川であるようだ。また、流域には図書館、学校、神社や教会なども多数あることから、そこは広島市の文教地区を流れる、文化豊かな地域とされていた。それは私が思う京橋川のイメージと少し違ったのだが、それは私が慣れ親しんでいた京橋川はその流れの一部であるからで、このページでは同じ京橋川でも、もう少し川を市内の中心部まで下った地域にスポットを当てているようであった。そこではコイやフナの放流、水辺の掃除など、川を美しく保つ活動がなされているようであった。もう１つは「広島橋めぐり８　京橋川」というページである。そのページには、広島城の京口門から京都へ向かう最初の橋が京橋であり、その京橋が架かっているのが京橋川であること、牛田で太田川本流と分かれた京橋川は、比治山の西側を通って広島湾に注ぐこと、橋は全部で１６個あり、その他にもＪＲ山陽本線と山陽新幹線の２つの鉄橋がかかっていることが書かれていた。私がバスでよく渡った橋は「牛田大橋」なので、最初の部分だけを読んだときには首をかしげたが、牛田大橋は１６個の橋のひとつであると思われ、「京橋」という橋はやはり牛田よりももう少し先を流れるところに架かっているようである。参考にWikipedia の京橋川の項目を見てみたところ、やはり猿候川との分岐点よりやや下流に架けられているのが京橋で、そこから川の名がつけられたということであった。また、私と母が渡った側道橋には「神田川側道橋」と書かれており、私も母もそれが不思議だったのだが、どうやら牛田に神田八幡宮があることから、その地域では「神田川」と呼ばれていたらしいということも分かった。

このように実際に川を近くで目にし、調べることで、新たに多くのことを知り、また考えることができた。私がこのエッセイを書く中で、川は人々に守られているのだろうと感じつつも、最も印象に残ったのは、「川は昔ほど人々にとって身近な存在ではないのかもしれない」という母との会話であった。そんなことを考えながら、私が撮った川の写真を私のブログに載せたところ、数年だけ広島に住んでいたという友人から「牛田のこの川の近くに住んでいて、この川が広島の記憶として最も強く残っている。」というコメントをもらった。この友人が牛田に住んでいたことも初めて知ったのだが、彼がこの川を私と同じように自分が暮らす町の象徴として記憶していたことに最も驚き、同時に嬉しくもなった。私は、いつまでも京橋川が牛田の町の象徴であってほしいと思っている。側道橋から川を眺めている人が減ったからといっても、中学生や高校生の時の私のように車やバスの中からこの川を眺めている人もいるだろうし、今京橋川が牛田の人々にとって遠い存在になっ

てしまったと決め付けることはできない。だが、私は今回改めてこの京橋川について考えていなければ、川の存在の大きさを知っていながらも、それを忘れていきかねなかった。川に油が浮いていた光景を目にしたときの少し悲しい気持ちや、川を見て「私の町だ」と安心した気持ちも、もしかしたら思い出すことはなくなっていたかもしれない。ただでさえ自然に触れることが少なくなった現代に、自分の身近な川について考えることはそう多くはない。しかし改めて川に思いを馳せてみると、その存在の大きさを実感できる。その存在を感じてさらに時が経った時、その川が美しくあって欲しいか、汚く濁っていてもよいのかを考えると、その川を自然のままに保とうという気持ちも沸き起こるだろう。人々が少しの時間でも川と向き合おうとする気持ちを持てるならば、その川はその町にとってより長い間大切な存在であり続けるのではないだろうか。私も京橋川がいつまでも牛田を出来るだけ美しく流れ続けてくれるよう、牛田に住む友人に今回の体験を話し、次回の帰省の際にはまた川を訪れてみようと思う。

＜参考文献＞

京橋川ばた界隈くらぶ
<http://kawabatakaiwaiclub.at.infoseek.co.jp/>
京橋川－Wikipedia
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%AC%E6%A9%8B%E5%B7%9D>
広島橋めぐり８　京橋川
<http://homepage3.nifty.com/sakatanifrozenrose/hasime8.htm>